

能登の真宗民俗と女性 ―嫁のコンゴウ参りを中心に―

本林 靖久（大谷大学）

本発表では、能登地方のコンゴウ参りについて、従来の研究成果を検証し、新たな視点から試論を提示する。コンゴウ参りとは嫁入りした女性が、実家（生家）の親の死後、盆前の一、二日、実家の手次寺（檀家寺）へ参詣することをいう。寺側では、他家へ他出した人を孫門徒（孫檀家）と呼んで、コンゴウ参りには、孫門徒だけではなく門徒（檀家）も参詣するので、最も参詣人の多い仏事となっている。

ところで、北陸地方は、浄土真宗の金城湯池と言われ、能登もその一翼を担う地域である。能登半島の浄土真宗寺院の割合は、石川県側の奥能登の旧珠洲市、鳳至郡では全寺院の70%、口能登の旧羽咋、鹿島両郡では全寺院数の85%を占めている。また、富山湾側の氷見市でも、市内の80%近くが浄土真宗寺院である。

したがって、コンゴウ参りは、「能登半島中央部・富山県氷見地方で行われている真宗行事」と説明もされるが（注1）、浄土真宗以外の他宗旨寺院においても行われている。例えば、真言宗寺院では「金剛会」と称されて法会が開催されているが、浄土真宗寺院では「魂迎」「魂供」という字をあてる場合が多く見られている。

真宗門徒は、「弥陀一仏」の絶対他力への信仰という真宗独自の合理的精神に基づいた「門徒もの忌みせず」といった明確な生活の規範があると言われてきた。真宗の教義に照らしても、真宗寺院のコンゴウ参りに「魂」を当てるのは不自然にも見られる。

このような能登に特有の宗教民俗と言えるコンゴウ参りについて、主体となる嫁入りした女性が、婚姻儀礼を通して、婚家と実家との間において、また、両家の手次寺とどのような関係を築いてきたのかに視点を当て、なぜ、コンゴウ参りが能登の真宗寺院の真宗民俗として続いてきたのかについて考察を試みたい。

能登地方では、嫁と実家との深い結びつきが、孫門徒として実家の親の死後に実家の手次（檀家）寺にコンゴウ参りをする背景になっていたように思われる。『氷見市史』の「民俗編」に、嫁と実家（里）との関係について以下の記述がある。

氷見における婚姻の習俗で特徴的なのは、嫁の里から婚家へ一方的に長期間にわたり贈られるツケトドケと、嫁が長期及び定期的に里帰りをするチョウハイである。このツケトドケとチョウハイをとおして、嫁は実家との縁をいつまでも続けていたが、これは嫁が婚家においていつまでも不安定かつ低い地位であったことと、婿の両親が長期にわたり家の中心的役割を担っていたことが影響していたと考える。

このような氷見・能登の婚姻習俗から嫁における実家と婚家との関係を具体的に報告し、従来、指摘されてきたコンゴウ参りの成立過程を検証しつつ、コンゴウ参りとはどのような真宗民俗なのかを報告してみたい。

（注1）『日本民俗大辞典 上』「コンゴウマイリ」の項、（吉川弘文館、1999年）662頁。